

寒川神社 田打舞解説

寒川神社宝物資料課 参事 学芸員 佐原 慧

田打舞 概略説明

【田打舞】

田打舞は当神社において、2月17日に斎行される祈年祭の中で執り行われる神事です。田打ちから稲刈りまでの一連の農作業を形容したものであり、五穀豊穰を祈念する神事でかつては「福種蒔」(ふくたねまき)とも呼ばれていました。当神社では「田打舞」と呼称されますが、このような神事、芸能を総じて「田遊び」と呼びます。

田遊びは廃絶したものもありますが現在300ほどの事例が確認でき、地域差はあるものの全国的に分布しています。その多くは「田植え」の所作を中心に演じられており、当神社の「田打舞」のように田打、田植えから始まり、稲刈りまでの一連の過程が演じられているものは全体の約1割程度です。



鍬を持つ白尉

寒川神社の田打舞 説明

1、明治以前

田端村に住む齊藤土佐といわれる者の家にて代々奉仕されていたが、明治維新後は廃絶。

(詳細不明、伝承のみ)

2、明治期の復興

明治21年 齊藤土佐の末裔である土継が同家に伝わる翁の古面を寒川神社に奉納、

当神社において田打舞が再興⁽¹⁾

明治27年 田打舞神事が休祭となる⁽²⁾

明治時代の田打舞の所作の詳細は不明であるが、同家に伝承された神楽歌に合わせて

農耕の様子を形容した舞いが披露されていたと考えられる

(1)『寒川神社文書』明治21年1月 庶務綴 寄付品御届

(2)『寒川神社文書』明治27年1月15日 社務日誌



「翁面」寒川神社所像 寒川町重要文化財
江戸時代末期に製作されたと考えられる。
切あごで鼻が大きく、猿楽の三番叟の翁
の系統に準じている。

寒川神社の田打舞 説明

3、大正期の復興

大正12年 改作の折、農耕に関する田打舞神事を強く復興する声があがる⁽⁴⁾

村持神主であった小菅家が黒尉を勤め、再興された

翁の古面を被り、畔作りから始まり、田打ち、福種蒔、鳥追いなどの所作が行なわれており

当時は現在のように稲刈りまでは表現されず、田植えに重点が置かれていた推測できる

4、昭和～平成期の復興

昭和63年 長年、演じられてきた田打舞であったが、かつての田打舞の姿を復元するため、当時の瀧本宮司によって

国立文化財研究所の三隅治雄氏を始めとした各方面の有識者に復興を依頼、文化資材の整理等を開始

平成3年 神社に残された神楽歌を基として、新たに舞いと地歌を構成し、黒尉(小菅氏)と、白尉(当神社の神職)

2人の翁によって農耕作業を形容する現在の田打舞が完成

この年の2月17日に斎行された祈年祭において奉納され、現在に至る



小菅氏翁姿

(4)『寒川神社文書』大正12年2月 庶務綴 糶種下附申請ノ件より

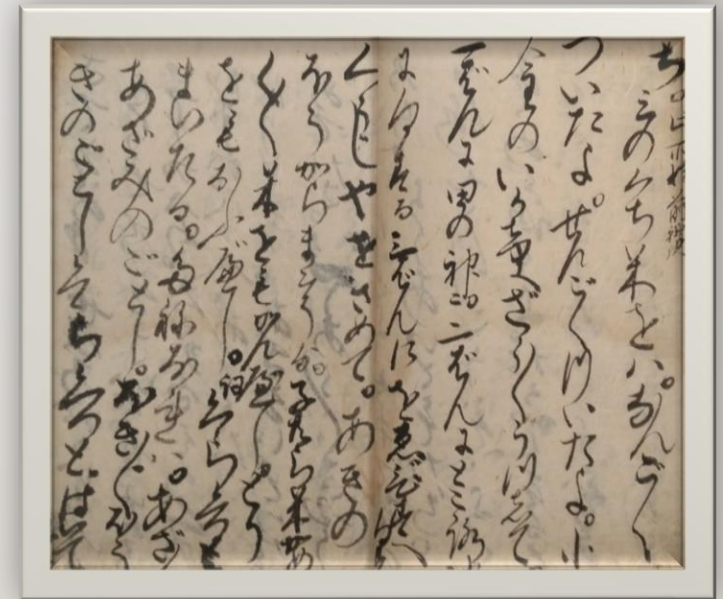
総括

明治時代以前の形態は資料が乏しく明確とは言えない部分が多くあります。

しかしながら、当神社に残された神楽歌からは、中世に伝播したとみられる田遊び、田打ち御田などと呼ばれる農耕芸能の古い形式が現存していることが見て取れます。

明治時代以降において、廃絶と復興を繰り返しながらも、豊かな稔りを祈念する田遊びの本質をしっかりと引き継いでいる貴重な神事であると思われます。

田打舞は復興して30年以上が経過していますが農作物の豊かな実りを祈念するこの舞は、稲作の重要性を顕著に表す神事であり、後世に伝承すべき伝統的な神事です。



「田打舞神楽歌」寒川神社所蔵